



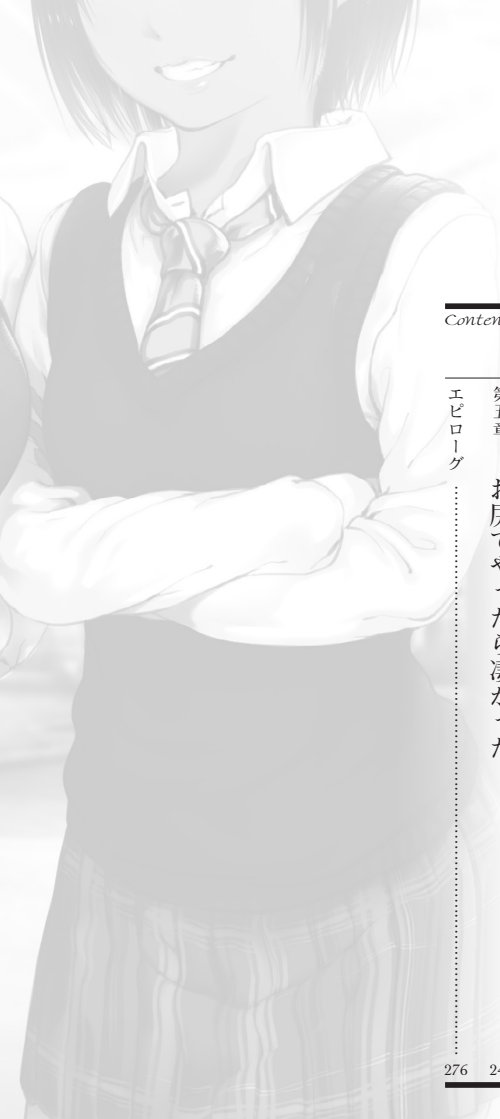
恋情クラスメイト

～誘・惑・勝・負～

伊吹泰郎

挿絵／くろふーど

立ち読み版



Contents

目次

プロローグ	4
第一章	告白したら逃げられた	21
第二章	雨が降ったら招かれた	61
第三章	トランプしたら目が覚めた	130
第四章	迷っていたらご奉仕された	184
第五章	お尻でやったら凄かった	240
エピローグ	276

登場人物

Characters

最上 良馬

(もがみりょうま)

仙波学園の二年生男子。流されやすい面があるものの、人の気持ちを理解しようとする優しさも持ち合わせている少年。紗彩に恋心を抱いている。

南戸 紗彩

(みなと さあや)

仙波学園の二年生女子。勝気に見えて純情なショートカットの美少女。童顔かつ背が低めで貧乳。陸上部所属で、引き締まった肌が小麦色に日焼けしている。

柏原 唯

(かしわばら ゆい)

仙波学園の二年生女子。紗彩とは中学以来の親友。お淑やかで天然ながら勝負事を好み、押しの強さも秘めるロングヘアのお嬢様。優しい顔立ちで、胸はHカップ。



第一章 告白したら逃げられた

「紗彩、聞いてほしいことがあるんだ。ちよつと一緒に来てくれないか？」

翌日の放課後、良馬は週番の仕事の後回しに、紗彩をA棟の屋上へ呼び出した。

告白のために選んだ場所が唯と重なったのは、そこが学園内で一番ひとけがなくて、誰かに聞かれる心配もないためだ。

この日、良馬はずつと落ち着かなかった。

紗彩から「おはよっ」と声を掛けられるだけで、「よおっ!!」と声を裏返らせた。イランイランのCDも忘れてしまった。

唯に挨拶された時も、椅子から飛び上がりそうなほど狼狽えた。

失恋した唯の方が、ずつと冷静だったほどだ。

「どうしちゃったのよ、今日は」

太陽の下で良馬と向き合いながら、紗彩は唇を尖らせる。

「わざわざ屋上まで来たってことは、よっほど深刻な悩みの相談なんですよ？ 聞いてあげるから、さっさと話しなさいよ」

腰に手を当て、頼りがいのある姉御を気取っているような態度だ。しかし、目の奥には労わるような優しい光もある——気がする。

「そんなんじゃないって」

「じゃ何？ まさか、唯を泣かせたんじゃないでしょうね？」

キュッと眉が吊り上る。さすが親友、ごくささやかな変調にも気付いていたらしい。

「それは……」

泣かせた、という点について、良馬は堂々と否定できない。

すかさず紗彩は詰め寄ってきた。

「あんだ、唯に何かしたの!! だったら、ごまかさないでよ!!」

近い。顔が近い。

息が届く距離まで来た上、背伸びまでしてくる。

「違う! そうじゃないって!」

良馬は耐えきれず、紗彩の肩を掴んで引き離れた。清潔感のあるブラウスに包まれた少女の感触は、びっくりするぐらいか細く、陸上部のエースなんて嘘のよう。

だが純情少年は、その感触に魅了もされる。

高まる鼓動から勢いを得て、なけなしの勇氣も爆発させて、彼はとうとう吠えた。

「お、お前に来てもらったのは、告白するためだよっ」

「え……!!」

紗彩が固まった。

逆に良馬の方は腹が据わって、思いの丈が迸る。

「俺、紗彩が好きなんだ。お前と話していると、俺も元気になれるっ。毎日、学校でお前と話す時が、最高に楽しいっ。だから頼むっ。俺と付き合ってくれ！」

「あ、あ、え……その……それって、冗談よねっ？」

何度も瞬きし、それから良馬の眼差しを意識したように、目を泳がせだす。

「本気だっって！」

「あたし、こんなチンチクリンなんだよ!!」

「自分で言うな。紗彩は可愛いんだから！」

普段のぼんやり屋とは別人のように、少年は声へ力を入れた。

「あ……う、うう……っ。でも……でも……っ……」

良馬はジリジリしながら、次の言葉を待つ。

やがて、紗彩は真っ赤になって顔を伏せた。しばらく唸ったかと思うと、

「無理っ！」

きつぱり言い放つ。

「え？」

「絶対無理！ 無理だつてば！ あんたをそんな風に見るなんて！ あたし、嫌だから！」

俯きながら捲し立てた拳句、持ち前の腕力で、肩に乗る手を振り解いた。

「ごめんっ！」

謝りの叫びを残し、脱兎のごとく逃げていく。記録保持者は伊達ではなくて、呼び止める暇さえなかった。

階段へ続く鉄扉がバタンと派手に閉められた後、

「……………紗彩？」

良馬の呼びかけが、ヒョロツと空気に吸い込まれる。

——最悪の振られ方だった。

もはや、明日から友達として接してもらえるかどうかも疑わしい。その場でへたり込みそうになりながら、良馬は気合で踏ん張った。

入口脇まで行って壁に寄り掛かり、空を虚ろに見上げる。

今日も、プラスバンド部や野球部は練習を頑張っているようだ。

(吸い込まれそうな青い空って、今みたいなのを言うんだろなあ……)
乾いた笑いが漏れてきそう。

ともかく約束があった。

良馬はポケットからスマホを出し、力の入らない手で、唯へ電話を掛ける。

呼び出し音が一回も終わらないうちに、唯は電話に出てくれた。

『……もしもし、最上君?』

気遣うような声の相手に答えようとして、自分が振られたのだと再認識する。

でも、落ち込むのは後だ。今はちゃんとしなければ。

「……………駄目だったよ。俺を恋人として見るのは、絶対に無理だったよ」

『……………そ、そうですか……………』

しばし、二人で無言。やがて、何か続けた方がよい気がして、良馬は口を開いた。

「俺、初めて知ったよ。告白って、とんでもないエネルギーがいるんだな。……………こんな言い方は変かもだけど、自分で告白を決めた柏原さんは、俺にはもつたいたいぐらい、かっこいい女子だよ。……………つまらない結果になっちゃって、ごめんな?」

『いけません……………。そんな言い方されたら……………私は……………』

唯の声は少し震えていた。だが、聞き返すより前に、声音はしつかりしたものに変

わる。

『これから最上君のところへ行っていいですか？』

「へ……？ ああ、まあ……」

今は顔を合わせるべきでないようにも思ったが、聞こえてくる響きが真剣で、良馬は頷いてしまった。

「俺は……A棟の屋上にいるよ」

『分かりました』という言葉を最後に、電話は切れた。

それから五分と経たず、唯は昨日、自分が失恋したばかりの場所へ、落ち着いた足取りで現れた。

「……紗彩ちゃんのこと、残念でしたね」

「ああ、うん」

唯が隣に来たので、良馬は彼女と並んで空を見上げる。

「ま、仕方ないな。あいつとはモロに友達って感じだったし」

半ば自分を納得させるために言う。

唯はすぐには答えず、僅かに身体を壁際から浮かせた。

「最上君」

「ん？」

「失恋を経験した者同士……ちょっとだけお付き合いしてみませんか？ 最初は形だけでも、そのうち本物の恋人らしくなっていくかもしれませんよ？」

真剣なのは、目を見れば分かった。

「最上君から見て、私は一人の女子として物足りないでしょうか。紗彩ちゃんのとことでできた心の隙間を埋めるには、役者不足でしょうか？」

「柏原さん……」

唯はそこで消え入りそうに俯いた。

「ごめんなさい。こんな聞き方だと、いいえとは返事しにくいですね」

「あー……ええと」

学年を跨いで続いた紗彩への恋愛感情を、簡単に捨てられるわけがない。しかしここで断つたら、もう一人の親友まで失いかねず、それが怖かった。それに失恋の辛さが、今なら誰よりよく分かる。

「最上君……」

再び上げられた唯の瞳は、切なく潤んでいた。

「今すぐ好きになつてくれなんて言いません。好きになつてもらえるように、まず私の方が努力します。……家族ぐるみでお付き合いのある大学生の『お姉さん』から、旦那様や恋人にするためのご奉仕、たくさん教えてもらつたんです。せめて、今日はそれを試させてください」

「はい？」

良馬の中で、何やら危険信号が点滅した。

唯は前方へ回り込んでくる。そこで一步踏み込み、背伸びをして、良馬の胸に手を添えたら——チュッ。

頬にささやかなキスをした。

「あ……」

彼女の掌も、唇も、胸板に当たつてたわんだバストも、揃つてファンワリしていた。ほんの軽いタッチで、しかもすぐ離れたのに、こそばゆさと存在感が少年の肌にしつとり残る。

特に直接触れた唇ときたら。クリームでできたお菓子さながらだ。

「え……う、お、ええ……っ？」

良馬は無意味に口を開け閉めしてしまふ。

大胆に振る舞った唯も、顔が真っ赤だった。しかし彼女ははつきりした声で告げる。「失礼いたしますっ……」

直後、その場で膝立ちとなり——またもやチュツ。

なんと二度目に口付けたのは、良馬のズボンのど真ん中、ペニスがある辺りだった。「い、えっ!!」

制服と下着、二重の布を間に挟んで尚、たおやかな感触が、男性器へめいっばい染み込んできた気がする。

ガクンと首を折るように下を向けば、いつもと違う角度から唯を見下ろすこととなった。

量が充分で、黒々としたロングヘア。自然な艶やかさが陽光を反射し——と、そこはまだいい。

マズいのはもつと下だ。この位置関係だと、乳房の成長ぶりがいつも以上に鮮明で何しろ、唯が素早く顔を離しても、スクールベストにできた豊かな丸みはズボンへくっ付きそうなままなのだ。

良馬だって思春期の少年だから、唯を性別関係なしの友人と意思つつ、巨乳にドキリとさせられることが何度かあった。

ペニスも毎日元気が余り、いくらオナニーしたって追いつかないほどの子種を、量産している。

しかも、しかも。

唯は頬を赤らめながら、無理に笑うような視線を良馬の方へ向けてきた。

「このまま……させてください……ね？」

どこまで行く気だ!?

少年は息が詰まり、尻へ変な力が入り——股間へは若い血が集まった。

そのせいで肉幹も亀頭もムクムク膨らんで、真上を仰ごうとし始める。

ズボンはそれを押さえつけていたが、性器は厚手の生地を力任せに押しつけ、唯が見ている前で、見事な縦長の隆起を作ってしまう。

「ま、まあ……」

吐息を漏らす唯。自身が迫っていたことさえ忘れかけたように、彼女は牡の膨らみ具合を観察し始めた。

無垢な視線に、良馬は全身から汗が噴き出す。頭部で毛穴がヒリつくほどだ。せめて一歩下がろうにも、後ろは硬い校舎の壁。

「待った……柏原さん……っ、こんな時に誰かが来たら……」

狼狽えて声を掛けると、却って唯に度胸を持たせてしまったらしい。

「ふふっ、誰も来ないから、告白の場所に使えるんですよ？ それにこの位置なら、出入り口の陰で、他の校舎からも見えませんし……。では、始めます……」

言って、良馬のベルトへ手をかけてくる。指の動きは拙かったが、息を呑んで動く姿はひたむきだ。

良馬は金縛りにかかったように動けなかった。非日常じみた展開で理性が麻痺し、唯の手つきへ目を奪われ続けてしまう。

その間にベルトのバックルが、次いでズボンのホックとファスナーが外された。

ストーン、と滑り落ちたズボンの下から出てきたのは、少年らしい黒のボクサーパンツだ。

股間にかかるのが伸縮性のある布地だけだと、ペニスの勃起ぶりは一層目立った。太くて長く、腰周りのゴムに行く手を阻まれて尚、手前の生地を伸ばして、上をふり仰ぐ。

根元にも先端にも圧迫がかかり、特に亀頭は締め付けられて、良馬は前屈みになつてしまった。

「うう……」

痺れは依然きついままだ。悩ましさを和らげたければ、もう下着を脱ぐしかないが——唯の前でそんなこと、できるわけがない。

そう思ったのに。

唯はさっきの要領で下着に手をかけたなら、縁を引き伸ばし、丁寧にズリ下げる。

きつい縛めが離れるなり、剛直はビントツと臍の方まで跳ね上がった。解放感も高まって、一緒に精液までせり上がりそう。

「お、う……」

「あふ……っ」

唯も息を吐くような、飲むような、微妙な呻きを漏らしていた。

居たたまれなくなる良馬だ。

もつともペニスの方は、気恥ずかしさを糧にますます膨張していった。亀頭は赤黒く充血し、竿との間にできたカりは、断崖さながらに逞しい。

肉幹も表面に血管を張り付かせながら節くれだって、ビクビクと揺れだしていた。実に見事な巨根ぶりだ、それを唯は熱心に見つめ続ける。

「柏原さん……頼むから、そんなに見ないでくれ……」

「あつ……す、すみません……」

我に返って、やっと視線を逸らしてくれる唯。そこで良馬はおそろおそろ聞いてみた。

「……気持ち悪くないのか、こういう見た目」

ペニスなんて、男にとってもグロテスク。品の良い唯が気に入るとは思えなかった。しかし、令嬢はたおやかに微笑む。

「保健体育の授業で、形なら知っていましたもの。それに……最上君のですし、むしろ愛おしいです」

「う……」

恥ずかしいことをサラリと言ってくる。

とはいえ、少女も照れがあるようで、頬を上気させていた。

「……こんなに大きいのに、女性器へ入るなんて……嘘みたいですね」

性教育の延長で、またも危険なセリフが飛び出した。少年にはインパクトがありすぎて、咄嗟に男根が弾んでしまう。

「あつ……」

猛々しい動き方に、唯はますます好奇心をそそられたらしい。多少おっかなびつくりながらも、竿へ向かって右手を伸ばしてきた。

「お、おい……落ち着け、柏原さんっ……!!」

「大丈夫です。具体的なやり方は、『お姉さん』から聞いておきました。……あら、そういうえは」

「こ、今度はなんだっ？」

「『お姉さん』のいない方達は、どこで詳しいやり方を知るのでしょう？ 学校では教えてくれませんでしたけれど……」

そりゃあ教えるわけがない。

「さ、さあ、なあ……？」

上ずった声で良馬がごまかした直後、白くて繊細な肌が肉幹へ触れた。

「ふぐっ!!」

男よりずっと細く、嘘みたいに柔らかい指だった。関節もほとんど目立たず、それでいて絶妙な張りがある。少し冷えているのも、熱を帯びた竿への刺激となった。

さらに指はそつと曲げられ、五本が根元近くへ絡み付く。可憐な掌も密着だ。

すでに力加減も学んでおいたか、握り方に迷いはなく、牡肉を甘やかすようにお押ししてきた。そうしてスローテンポで、シコシコと手の筒を上下に走らせだす。

「は、お、おっ……!!」

オナニーとは別物の快感だった。

少年が自分でやる時は、扱しじく動きに遠慮がない。

しかし唯の場合は丁寧さが先に立つ。肌の瑞々しさも男根の凹凸へしっくり馴染み、幹の表面を伸縮させた。

手が亀頭の方へと昇れば、竿の皮が緩み、こそばゆさが渦を巻く。直後に手の縁がカリの溝へコツンとぶつかり、愉悦がパッと破裂して。

「ふお……っ!!」

良馬が硬直している間に、また手は下降した。

竿と一緒に、痺れたばかりの亀頭も張りつめていき、快感をしっかり定着させられる。

良馬は無意識に脚を肩幅より開き、背中を壁に預け、股間を女友達へ差し出す体勢になっていた。

今からでもやめさせるべきだと、頭では分かっている。なのに続けてほしいという願望も出てきてしまう。それほど少女の手コキは心地よい。

葛藤する良馬の耳に、唯のはにかみ笑いが滑り込んできた。

「こういう時は、男性器をお・チ・ン・ポ……って呼ぶんですよね？」

「いつ!？」

「私……そういう言葉は、小さい男の子がふざけて使うぐらいだと思っていました」とんでもない『お姉さん』の入れ知恵だ。驚きと昂^{たかぶ}りでペニスの反りが大きくなれば、唯はとでも嬉しそう。

「最上君のおチンポ、とつても熱いです……っ。これってちゃんとできてるからなんですよね……?」

彼女は続けて声をかすれさせ、

「でも、変なんです……。胸が熱くなってきた……。ん、しているのは私の方なのに……最上君の匂いで、私もおかしくなってきたみたいです……っ」

「……!？」

おっとりした柏原さんが、俺のモノを嗅いで興奮してるっ!!

良馬は鼻血が出そう。加えて、鈴口から粘っこい我慢汁が溢れているのにも気付く。性臭は風に散らされていたのだが、唯ほど近いと、湿っぽさが直撃らしい。

牡液は裏筋を通って、唯の手にまで届いていた。そのヌトつきを受けて、唯は左手も持ち上げる。

「次は……こうしますね……」

開きかけの鈴口に掌をかぶせ、液の粘りを塗りだす彼女。

「お、つおおおっ!!」

広範囲をツルリツルリと捏ねられて、良馬は膝が折れかける。その獣じみた声に、唯も驚いたようだ。慌てて両手を引っ込めた。

「す、すみません……! 今のは痛かったですか!」

思いがけないところで、実践不足が露呈した。

ここで上手く対応すれば、彼女の暴走を止められるかもしれない。

なのに——良馬は労わり口調で言ってしまった。

「いや、大丈夫だ……ええと、気持ち良すぎて、さ……」

口を動かしながら、自分の馬鹿さ加減に腹が立つ。だけど言葉を引っ込められない。もつとしてほしいのが本音なのだ、彼は否応なく自覚した。

「あ……男の人って、感じるほど声が大きくなるんですけどね……」

唯も安堵した様子で、右手を竿に、左手を亀頭にあてがい直す。

再び滑りだした左掌は、みるみる速度を上げていった。亀頭との間に隙間は皆無で、痺れも一瞬たりとて途切れない。右手が下がって牡粘膜を張りつめさせた瞬間など、肉棒はパンクするのではというほど疼いてしまった。

「ああ……最上君の……どんだんヌルヌルしてきて、不思議な手触りです……。こんなに濡れるなんて……知りませんでした……」

唯の愛撫は亀頭をはみ出し、裏筋にまで及んだ。

攻撃対象が広がれば、時に亀頭から掌が離れるようになる。しかし、僅かな空白を置いた後で揉まれてみれば、肉棒の切っ先ではさらなる官能電流が荒れ狂った。一瞬の焦らしと、菌痒さを埋める快楽。その緩急が良馬の肉欲を次の段階へ引き上げた。

「は、う……俺、俺は……あうっ……!？」

竿への奉仕が、だんだんおとなしく思えてくる。こちらは始まった時から一貫して緩やかなまま、リズムが全く変わっていないのだ。

ここで唯に指示すれば、完全に行為を受け入れたことになる。

良馬は迷ったが、すでに愛撫を中断してもらう機会など放棄している。結局、わななく口を開けた。

「悪い……柏原さん……っ。右手を、もっと強くしてほしいんだ……っ。その、一度に両手で、ち……チンポの先から根っこまで、いっぺんに扱いてくれっ」

「は、はい……っ！ 分かりました！」

恋する相手から初のリクエスト。唯も張り切り、両手で怒張を握り直す。陰毛の縮

れる竿付け根から、我慢汁で濡れ光る亀頭の曲線にかけてを、勢い充分に扱き始めた。肉幹の皮はスプリングさながら伸縮し、愉悅も数段飛びに跳ね上がる。

「くっ、んっ、んっ……こうっ、こうですか……っ？」

「ああっ！ いいっ！ 俺……っ、そういうのがっ、感じるんだ……！」

右手の横が軽く当たるだけだったエラは、何度となく踏み越えられた。

並んだ指が、傘と裏筋に引っかかり、駆け上がっては駆け降りる。苛烈なピストンによって、神経は曲げ伸ばしされた針金よろしく千切れそう。

唯はひたすら健気なのに、良馬が抱く快楽は何やらマゾヒスティックだ。

我慢汁もグチュグチュッと下品に鳴らされていた。上がってきた手で搾り出された多量のヌメリは、下がる動きで肉棒全体へまぶされる。

「は、お、うっ……！」

次第に良馬は、別の物まで搾り出されそうになってきた。

底の方に結集したゲル状の子種。ずっと出る機会を待っていたそれらが、激化した手淫でグイグイせり上がりだす。

「で、出るっ……も、俺……イクっ……！」

良馬は壁の上で両手を握りながら喘いだ。

「では……あのっ……」

唯は射精を受け止める方法を探すように、キョロキョロ周囲を見回す。そんな妙に初々しい仕草の後、器のように中央を窪めた左掌を、鈴口間近へ持つてきた。

「ここへ出してください……っ」

結果、肉棒上で往復するのは右手だけに戻り、手コキの範囲も竿の根元からカリ首までに限定される。だが、すでに勢いは確保されていたし、ヌルヌルの屹立を逃がすまいと、握る力も強まっている。

人差し指と親指は、両手で生んだ快感を再現したがるように、エラの裏をめまぐるしく突き上げてきた。

「お、あおうっ!!」

カリをノックされるたび、精液は密度を増していく。あんまり多量に集まりすぎて、却って尿道を塞ぎそう。それだけに発射された時の肉悦は凄そうだ。

良馬はその場で踏ん張り、へたり込みそうなのを堪え続けた。しかし、そんな力も射精の準備に向けられる。絶頂の時は刻々と迫る。

やがて昇天の決め手となったのは、エラの付け根と裏筋を一度に打たれた鋭い法悦と、それを受けた腿の筋肉の突っ張りだった。

「ふ、う、おうううっ!!」

出、るうう——っ!

切迫感が頭を占領し、ザーメンの塊は荒っぽく尿道を貫きながら、ただ一つの出口へひた走る。体内粘膜が振れそうな、肉悦の強烈さ。

自分で弄った時は、イク時も簡単に声を抑えられたのだ。なのに、唯にされると、学園にいるにもかかわらず、高い^{いなな}嘶きが喉の途中まで来てしまう。

「あ、つああううっ!」

目を閉じ、必死に唇を噛んだ少年の股間から、ドクンドクンドクンッと白濁液が噴水のように打ち上げられた。

「きゃっ!!」

唯が華奢な肩を竦ませてしまうほど、スペルマは左手に激しくぶつかっていく。

二度、三度、四度。怒張は握られたまま脈打って、ようやく射精を終えた。と思いきや、

「ん……っ……」

唯が何気なく手を動かした拍子に、追加の痺れが鋭く突き抜け、またも一打ち、元気に子種が放たれた。

「ふ、あ……最上君のが……こんなに……」

まるで一緒に果ててしまったように、唯はうつとりしていた。そして右掌に何本もの糸を引かせながら男根を手離し、両手を汚す男汁を見比べ始める。

「男の人のつて……こんな……ネバネバしているんですね……。これが赤ちゃんになるなんて……不思議です……」

「あ、ああ……」

良馬も昇天の衝撃が脳内に蟠わだかまっていたが、どうにか頷いた。

「柏原さん……」

「はい……最上君……」

幸せそうに呼び返してくる少女。

慈愛混じりに細められた彼女の瞳に、少年は見惚れかける。が、ふと思いついて、その場にしゃがみ、丸まったズボンのポケットからティッシュを出した。

まず左手から、次に右手も。唯の汚れを拭き取っていく。

一途に想ってくれる少女の目を、至近距離から見返せない。念入りにティッシュを使うふりをして、視線を彼女の掌に落とし続けた。

「なんつうか……その、ありがとな」

思いつくセリフもそれで精一杯だ。

対する唯の声色は、包容力に満ちていた。

「私こそ……ありがとうございます。でも、もう明日からこんな強引なことはやめておきますね。最上君は優しくして……あまり続けていたら、無理にでも私とお付き合いしなければと考えそうです」

「そ、そうか？」

これで終わりと聞いて、一瞬、胸が痛んだが——いや、これでいいに決まってる。

「私、責任を感じてほしくて、こんな風にしたわけじゃないんです。別の方法で振り向いてもらうように考えます」

「……柏原さんは俺を過大評価しすぎだよ。俺は優柔不断をこじらせただけなんだ」

「いいえ。気持ちを無視して迫ったのに、快く許してくれた最上君は、絶対に優しい人です」

「いや、あのさ……」

「それに、私は優しくない最上君でも、好きになると思います。いつか……強引に征服されてみたいんです」

「おいおいおいっ」

これもさじ加減を間違えた冗談だろう——と良馬は思うことにする。しかし、ペニスの方は最大サイズのまままでビクリッと弾んでしまった。その疼きは肉棒に収まりきらず、腰の裏まで疼かせる。

「ふ、くっ……！」

「あ……」

唯が悪戯っぽく笑った。

「最上君、まだ元気なんですね。こういうこと、明日からは本当にやめますけれど……でも今日だけは、あなたが満足してくれるまで、続けていいですか？」

おとなしそうに見えて、唯には魔性の女の素質が眠っているのかもしれない。

誘う眼差しの色っぽさに、達したばかりで心のタガが緩んだ良馬も、反射的に頷いてしまう。

「よかった……」

唯は安心したように目を細めつつ、自分のスクールベストに手をかけて——。

「……ふふ……体育の授業前でもないのに、学校で脱いでしまいました。でも、こういうドキドキ、私、嫌いではないかもしれません……」

——また、そういう危うい発言を。

場所が学校の屋上なのに、唯はベストもブラウスも取り払ってしまった。もう上半身を隠すのは薄桃色のブラジャーのみだ。そのくせ、脱いだ服を置く前に、軽く畳む行儀の良さは残る。

半裸になった唯の巨乳は、着衣時以上のド迫力で、マズいと思いつながら、良馬は視線を釘付けにされてしまう。

下着にはレースが多く、ドレス風の凝った造りだ。大人びたカップが膨らみを下から支え、そのカップのサイズがやたらと凄い。パンパンに空気の入ったバレーボールが半分ぐらい、スポッと入ってしまいそう。このデカさとデザイン、ひよつとしたらオーダーメイドなのかもしれない。

それでも尚、乳房は三分の一近くが露わで、谷間に深い影を作っていた。反対に丸みを帯びた部分は、日の光を眩しく弾く。

良馬には女性の胸のサイズなど分からなかったが、前にマンガ雑誌のグラビアで見た公称Gカップのアイドルより一回りは大きいようだ。

そこまで目立つ膨らみなのに、身体の他の部分と比べても、歪いびつな感じはまるでなかった。

細い二の腕や肩。優美な括れを描きつつ、お臍まで完璧に近い形の腰周り——そういった各パーツと、見事な調和を取っている。

良馬は生唾を飲んだ。この先何をされるか聞かないうちから、ペニスが手コキされた時以上に反つくり返つて、ジンジン痺れた。

と、唯が会釈と似た仕草で上半身を傾け、ブラの後ろのホックを外す。

カップはあっけないほど簡単に肢体からズレて、少女のストラップを外す動きで、完全に巨乳を解き放った。

「うあ……」

隠すもののなくなったバストに、良馬は驚嘆させられた。

豊満すぎる膨らみぶりは、少年が五指を広げて、やっとすくい上げられるかどうか。そのズシッと重そうな質感を、下側の丸みと三日月状の影が強調している。

素肌は無理やり突いたらパンクしかねないほど上気しつつ、下着の助けを失いながら、懸命に重力へ逆らっているように見えた。人工物にはあり得ない生々しさだ。

乳首は薄いサーモンピンクで、すでにポッチリ勃たっている。それを思ったより大きめの乳輪が、真円で縁取っていた。

良馬が凝視し続ける前で、唯も僅かに身じろぎした。それだけで膨らみはタウンと

揺れる。乳首をこぼしそうになる。

「……私の胸、そんなに気に入ってくれたのですか……?」

「あ、と、悪い」

良馬は慌てて視線を唯の顔へ移すが、向き合くと余計に照れくさい。

「……ええと、次はどうするんだ?」

良馬は、唯と彼女の後方の手すりを半々に見ながら尋ねた。

「次はこの胸で最上君を気持ち良くする方法に、挑戦してみたいんです」

「胸って……」

「パイズリと呼ぶのだと聞いています」

「お、お……」

見ているだけでもどうにかなりそうな爆乳に、ペニスを挟まれるなんて。

目を丸くする良馬の前で、唯は自ら胸へ手を添え、持ち上げるように谷間を開いてみせた。指先は柔肌へ食い込むものの、膨らみには弾力も詰まっているらしく、今にもツルンとこぼれそう。

「立って……くれますか、最上君……」

「あ、ああ……」

少女は身を乗り出し、ペニスへ寄ってきた。少年の方はいえ、相手の言葉に従うのがやっと。

ゆっくりと二人の距離は縮められていき、とうとう乳房の片方が、精液塗れの亀頭に触れた。

「ふぐっ……!!」

心地よさが良馬の脳内へもつれ込む。バストは、もち肌と呼ぶのがぴったりの柔らかさと吸い付きを備えていた。達したばかりで感じやすいペニスには、過度の媚薬同然だ。

良馬が壁へ背中を擦り付ける間に、唯は両胸を左右から寄せてくる。

こんな気持ちいい場所に包まれたらどうなるのか。

良馬は慄おのきすら抱く。

答えが示されたのは次の刹那だ。胸と胸とが隙間をなくし、そそり立つ竿を閉じ込めた。

「ほ、おおうっ!!」

膨らみは空気を追い出し、体温で男根を蒸してくる。しかも、竿のゴツゴツやエラの段差に、みっちり形を合わせた。その陶然とさせられる心地よさ。鈴口周りだけは

包围を免れたが、端からびよこんと出た様子は、いかにも溺れる寸前といった風だ。水音がグチュグチュ鳴るのは、子種の残滓が入念にすり潰されたからで。透けるように清らかな肌を、己が汚してしまったのだと、良馬は実感させられる。

もつとも唯の方は、嬉しげに吐息をこぼしていた。

「は……ああ……」

ザーメンの粘り気を試すように、手を締めたり、緩めたり。乳房もそれと合わせて、ひしゃげてはまた丸みを取り戻す。ペニスはその道連れで、揉まれるままにビリビリ疼いた。

「か、柏原さん……それっ、それは……あ……」

良馬が呼べば、唯は力を緩めて、聞いてきた。

「痛い……ですか？」

「いや、そうじゃなくて……感じすぎつつうか……」

途端に少女の顔が明るく輝く。

「では、このまま続けてもよいのですね……っ？」

「それはそうなんだけど……さっ……」

どうやら、猛烈な快感への不安が理解できないらしい。

良馬が説明を迷う間に、彼女は甘いプレスを再開させた。

己の膨らみとペニスを、纏めて捏ねて、揉んで、また捏ねる。料理の下ごしらえでもしているような姿だ。もつとも、唯の感想は全く違い、

「私……良馬君のおチンポに、ミルクをあげているみたいですよ……。よしよし、良い子ですね……。なあって……。ふふっ」

「そ、そういうこと言われたらっ、う、うう……。っ、感じすぎはまずいんだって……。！」
あまり喘いでいたら誰かが聞き付けてしまうかもしれない——と、分かっているけど、良馬の喉は震えてしまう。

唯も止まってくれなかった。

痴女さながらに、男根へ唾まで垂らしだす。舌上に集められた液は、白っぽく泡立ち、粘度も高め。それが良馬の鈴口をボタッと打ったのだ。

「はおっ!!」

良馬は痺れと共に、少女の体液に尿道まで侵略されそうだった。

「……唾なんて、失礼ですよ。でも……。こうすると、滑りやすくなるそうなんです」

唯は弁解しながら、もう一度、唾で龟头を狙い撃つ。意中の少年を悶えさせたら、巨乳を互い違いに動かし始めた。

右の膨らみを持ち上げながら左側はクイツと下ろし。左を上にする時は、右側をズリ下げていく。

怒張からすれば、エラを捲られ、竿も根元から振り回される格好だ。一緒に玉袋までプラプラ揺れて、何から何まで悩ましい。

「ん……少し、難しい……ですね……。気を付けないと……。最上君のおチンポが滑り出てしまいます……」

責める立場の唯も、集中する必要があるらしい。大真面目に呟いたら、一段と竿を圧してきた。

「つ、はうう……!! 柏原さん!!」

その危うい力加減のまま、身体を上下に揺すりだすお嬢様。当然、バストが竿を扱きだす。小手調べめいた動きでさえ、牡肉をおかしくしそうだったのだから、快樂の上がりは天井知らずだ。

二つの膨らみが揃って上昇すれば、エラの窪みが振れそう。パイズリはそれからさらに昇り続けて、一度は逃した亀頭の先端まで丹念に揉み解した。

次いで急降下すれば、牡粘膜の丸みも肉幹も隙間なく撫でる。

しかも、昇りきった乳房の上端は、挟むものがないので、膨らみ同士がムッチリく

っ付いていた。そこが重みたつぷりに降ってくるから、矢面に立たされた鈴口は、我慢汁をこぼしているところを、ますます開かれる。エラへは鋭い愉悅が突き刺さりっぱなしだ。

そんな律動が、何度も繰り返された。

「はあっ、はあっ、んっ……！」

動きを派手にしてきて、唯も息を弾ませる。

乳房は硬い竿が引つかかるから、肢体が上がる際には、合わせ目を内側へ巻き込まれた。少女が腰を落とせば、逆にそこが盛り上がる。

一瞬たりとも同じ形に留まらず、底なしの柔らかさが晒されて。

と思えば、少女は呼吸を整えるために、いきなり止まったりもした。

「ふ、あ……はあ……」

息継ぎの間は、細い肩が僅かに上下。良馬が思っている以上に体力を使っているらしい。ただしその間も、手は強弱付きでエラをやわやわ揉んでくる。

少女からすればサービスなのだろう。が、少年は休ませてもらえないのがきつい。

加えて、緩い快感を間に挟むと、ペニスも愉悅を吸収しやすくなるらしく、往復が再開されるたび、刺激は脳天まで突き抜けた。

「うあ、ぐっ！ おっ、ううっ……！ 俺……これじゃまたイク……出ちゃうって……っ！」

良馬は危機感と共に吠える。

このままでと、唯は上半身で白濁を浴びることになる。ネバつきの広がり方は、手コキの時の比ではないだろう。

なのに、彼女は熱を含んだ声で答えたのだ。

「は……いっ！ 出してください……っ。いつでもっ、最上君の好きな時に……！」
「反り返ったペニスを挟み続けることに集中しているらしく、顔は胸元へ伏せられたままだ。しかし、訴えと共にペースはアップ。」

「出してください……どうぞっ、最上君っ……おチンポッ、しゃ……射精してえ……っ！」

竿と亀頭はとことん嬲られ、愉悦の向きもめまぐるしいほど入れ替わる。精液が尿道へ集まり、そこへ着火を試みるように、エラでの痺れが連発された。

「おっ、くああうっ!!」

良馬は大声を堪えきれなくなった。青空を仰げば、その瞬間の解放感の絶大なこと。意識がどこまでも拡散しそうだ。

スペルマの存在感は、もはや手コキされた時以上で、尿道を無理やり拡張している。膨らみすぎた肉竿の根元は、パイズリをギュウギュウ押し返すよう。

唯も、もう休もうとはしなかった。

腿を伸ばし、上半身を反らしたところで、「んうっ!？」と打ち震えたり。

あるいはヌメるペニスを取りこぼしかけ、慌てて胸を寄せ直したり。

動きが揺らげば、快感も奇襲同然に変化する。良馬は階段を駆け上らされながら、時に足をすくわれる心境だった。

「柏、原……さんっ、も、ちよつと……ゆっくりで……!」

頼もうとするが、少女は動きながら、うわ言めいたものを吐いている。

「んっ……最上君……っ……す、好き、です……っ、最上……君っ!」

切れ切れにしゃくり上げ、周りのことなど見えない様子。

よく見れば、彼女の反応が大きくなるのは、しこつた乳首が良馬の股へぶつかった時だ。

「いううっ! も、最上く、ん……!」

「柏原さん……! く、聞いてくれよっ」

良馬は女友達の肩を叩いた。今度は少女も「んっ」と見上げてくる。形が良かった

眉はハの字型に端を垂らし、額や頬は真っ赤に汗ばみながら、ほつれた髪を張り付かせている。熱で浮かされたように目元が潤み、口元はしどけない半開き。

「ぐ……………」

少年は胸が強く一打ちし、股間の中ほどまでザーメンの侵入を許してしまった。残された時間は、きつと三十秒足らず。

「最上……………君……………?」

「あ、いやっ……………柏原さん……………乳首、仕上げに自分で弄ってみてくれ! 感じてる姿を見たいんだ!」

もつと優しい愛撫を頼みたかったはずが、注文は直前で変わってしまった。今の唯を見たら、もうそれしか頼めない。

「あ……………え……………乳首、を……………!?!」

唯は戸惑い気味だった。やつと感じすぎる怖さが伝わったらしい。だが、すぐさま頷いてくれる。

「は、はい……………最上君!」

両手の親指と人差し指で、突起を二つとも摘み上げたら、

「ひうっ! ん、ふうんっ!?!」



感極まったように目を閉ざし、唇の端をキュッと嘯む。

高められた快感が、乳頭を猛スピードで襲ったのだろう。背筋がしなり、乳を締め
る力は倍増だ。

「最上君っ……わ、私の胸っ、おかしくなっていますう……っ」

追いつめられた状態でも、手は振動させ続ける彼女。痙攣じみたパイズリは、絶頂
を催促してくるようだ。

そんな唯のよがりっぷりと亀頭への猛攻が、良馬の最後の歯止めを粉碎した。

「っ、お、うあうっ！ イ……クぐううッ!!」

エラがどうしようもなく疼き、そこへ子種が押し寄せる。尿道を中から逆撫でされ
る痺れによつて、パイズリの肉悦も数倍以上に肥大化だ。

そして、二度目の射精。

スペルマは敏感な鈴口を押しつけて、真上に飛び上がった。

危惧した通り、白濁がへばりついた先は唯の柔肌だ。少年の位置からは見えなかつ
たが、生臭い粘りが喉から胸にかけてを、ドロドロに汚したことは直感できた。しか
も、液はその重みでバスタの合わせ目まで垂れてきて、裏筋にも熱い感触を伝える。

唯は精子を浴びながら、未だに乳首を弄り続けていた。

「んくっ！ 最上君っ……私っ、どうすれば……っ！ こんな……うっ……胸が……熱……く……っ、声っ、出てしまいそ……です……！」

救いを求めるような口ぶりと裏腹に、荒っぽい指遣い。ヌメリを皮下組織まで擦り込むように乳と怒張も擦り合わせる。

「お、く、おおっ!!」

ペニスもまるで衰えず、その感度は振り切れたままだ。

思わず良馬は腰を前後させてしまった。乳肉の合わせ目を猛る肉欲でめつた刺し。

「んううっ!! 最上君っ……!! く、はううっ!!」

自分が本当に唯を汚したくないと思っていたのか、彼にはもはや分からない。

ビュクッ!

さっきのように、オマケの一打ちがバストの谷間を穢すのを感じても、ケダモノのように血が騒ぐ。

親友二人のこんな浅ましい姿。

きつと紗彩は想像したことすらないだろう。

明日から、自分達の関係がどう変わるのか。良馬には見当もつかなかった。

* * *

南戸紗彩は家に帰り、部屋へ飛び込んでからも、鼓動が激しいままだった。

紗彩の家は、学校から歩きで十七、八分ほどのところにある。そこを全速力で帰れば、いくら陸上部のエースだって息が上がった。

しかし、一番の理由は良馬だ。

（良馬の馬鹿、大馬鹿！　なんてこと言い出すのよ！）

枕に顔を埋めながら、紗彩は心の中で文句を並べた。

彼女に異性と付き合った経験はない。だから恋人同士のイメージといえば、ひどく漠然としている。

たとえば、手を繋いでデートしたり、二人きりの時に——キスしたり。

そこまで考えてから、紗彩はくぐもった悲鳴を上げた。

（む……無理よ、絶対に無理！　確かに良馬は他の男子とは違うけど……！　こ、恋人同士じゃ恥ずかしくって、顔も見られなくなっちゃうってば！）

そう思う傍から、少年の呑気な笑顔を思い出し、ますます頬が熱くなる。

だが、さっきの行動がまずいことなら分かっていた。

何しろ、一方的に叫んで逃げてきたのだ。いくら良馬でも怒っただろう。

(うん、あたしがアイツの立場だったら絶対に怒る……って、違う違う違う！ あたしが告白するとかじゃなく！)

自分に言い訳しながら、無闇に脚をバタつかせる紗彩。

とにかく、謝ろう。だけど、どう言えいいのか――。

考えていられる時間は明日の朝までだった。

良馬と学校で会うまでに、何としても仲直りの答えを見つけないといけない。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>